

化学委員会・総合工学委員会合同
触媒化学・化学工学分科会（第 26 期・第 5 回）

議事要旨

■日 時：令和 7 年 12 月 1 日（月）10:00～11:30

■会 場：オンライン（Zoom）

■出席者：（敬称略）

対面：北川尚美、伊藤宏幸、山内紀子（記）

オンライン：阿尻雅文、後藤雅宏、鈴木朋子、関根泰、瀬山倫子、辻佳子、
藤田照典、野田優（記）

ゲスト：北川宏（京都大学、オンライン）

■欠席者：（敬称略）

大河内美奈、工藤昭彦、椿範立、所千晴、藤岡恵子、藤岡沙都子、平尾雅彦、三浦佳子、宮崎あかね

■議 題：

（1）前回議事録の確認

（2）意思の表出・公開シンポジウムについて

2-1. 北川尚美委員長より趣旨説明

研究エシックスの問題を背景に、研究者モラルの低下、審査員選考や判断の課題、申請負荷の高さ、低い採択率、NEDO・JST 制度改善の必要性などが議論されてきた。多くの委員が JSPS の審査制度を高く評価しており、その理念・仕組み・改善点について学ぶ目的で京都大学・北川宏氏を招いた。

2-2. 北川宏氏による話題提供

テーマ：日本学術振興会 学術システム研究センターの役割と審査制度

2-3. 主な質疑・意見交換

- ・ 科学技術政策・研究環境：CSTI の常勤議員数減少による弱体化により科学政策の司令塔機能が低下。英国の「政策科学顧問」制度のような仕組みが日本にも必要との意見。
- ・ 研究費制度と採択率：科研費採択率向上が重要。日本はようやく 3 割へ。カナダでは制度上の理由（PI 限定応募、教員職務区分など）により 8～9 割。コアファシリティ整備により 個別設備購入を抑制する国もある。採択率向上と同時に出口管理の重要性も指摘。
- ・ AI による申請書作成：若手が積極活用している実態。見抜くことも AI の得意分野。ある大学では「省力化は良いがモラルも重要」と議論。
- ・ 教育教授・研究教授制度：日本では研究・教育が一体化しているが、採用段階から職務分離を明確にする必要性を指摘。

- ・ トップダウン研究 vs. ボトムアップ研究：現在、実用化志向が強まり、基盤研究にも実用性が求められる傾向が問題。本来、基盤研究は「自由な研究の継続支援」が目的。科研費の研究種目の増大により基盤研究の趣旨が曖昧化する懸念。
- ・ 研究費獲得の評価について：研究費獲得そのものを評価する風潮は「研究費獲得のための研究」を助長。日本の論文引用が伸びない要因として、独自研究への過度なこだわりによる流行研究への参入の遅さを指摘。
- ・ 若手研究者の雇用安定性：任期付きが主流となり、腰を据えた研究が難しく挑戦性が低下。
- ・ 産学共同研究について、アメリカの著名大学との共同研究は1/3がdonationで、自由な研究に活用。
- ・ 大型プロジェクト関係では、科研費からの「育成ライン」が弱い点や、0→1の段階を後押しする仕組みの必要性を指摘。

(3) その他

分科会の議論を「記録」にまとめるべく、幹事で素案をまとめ、12/25に議論する。